

第4期第11、12回詳報

仮設用地 確保に苦慮

「候補地 前もって検討を」

311 伝える／備える 次世代塾

東日本大震災の伝承と防災啓発の担い手育成を目指し、河北新報社などが運営する通年講座「311『伝える／備える』次世代塾」

町職員ら43人が犠牲になった旧防災対策庁舎の前では、黙とうをささげた。

第4期は12月、第11回講座を宮城県南三陸町からオンライン中継したほか、学校の津波避難をテーマに第12回講座をウェブ配信した。

町には平地が少なく、浸水エリア外で仮設住宅の用地確保に苦慮したという。

第11回講座は南三陸研修センター代表理事で元副町長の遠藤健治さん(72)が講師を務め、町震災復興祈念公園を歩きながら被害と復興と歩みを説明した。

「前もって地域で候補地を検討しておけば、復興のスピードは上がる」と提案。仮設住宅の完成を待てずに町外のみなし仮設住宅に入居した被災者も多く、「町の人口減少の一因になった」と述べた。

「祈りの丘」の中腹を巡る海拔16・5メートルの「高さのみち」で、この高さの津波が市街地を襲った。高さを感じてほしい」と呼び掛けた。津波にのみ込まれ、

オンラインで質疑応答も行った。防災・減災の心構えを問われると「普段から身の回りの災害リスクを認識し、命を守る行動が取れるように準備してほしい」と回答。地域再生の課題については「仮設住宅と違い、

災害公営住宅はプライバシーが守られるが、コミュニティがなかなか作れない」と説明した。

(63)が講義をした。同校が震災前に避難マニュアルを作った際、3階建て校舎の屋上と高台のどちらを避難先にするか、議論を重ねたが、結論は出なかったとい

う。

震災では高台を選択。津波は校舎の屋上に達した。「なぜ高台に逃げたかはよく分からない。悠長なことは言ってもらえないと人数確認などを全部省略して逃げた」と話す一方、「津波が短時間で来たら避難の途中で流されたかもしれない」とも語った。

麻生川さんは「危機的状況では正解のないような判断を求められる。選択の余

地を残し、より良い判断ができるようにしておくことが大事だ」と訴えた。

遠藤健治さんが避難について語った「空振り三振はしても、見逃し三振はするな」という言葉が心に刺さりました。結果的に空振りになったとしても実際に避難することが、適切な判断と迅速な行動につながる一歩になり、災害時に生きとくと強く感じました。(岩沼市・東北福祉大1年・森健輔さん・18歳)

遠藤健治さんが避難について語った「空振り三振はしても、見逃し三振はするな」という言葉が心に刺さりました。結果的に空振りになったとしても実際に避難することが、適切な判断と迅速な行動につながる一歩になり、災害時に生きとくと強く感じました。(岩沼市・東北福祉大1年・森健輔さん・18歳)



市街地を襲った津波高と同じ海拔16.5mの「高さのみち」で講義をする遠藤さん

遠藤健治さんの講義で、ハザードマップに「浸水域外」と掲載されていても、マップは一つの想定に過ぎず、安全とは限らないことを学びました。震災10年前に自分の住む場所の災害リスクを再確認し、命を守る行動を見直す必要があると考えました。(仙台市若林区・宮城大2年・尾形紗希さん・20歳)

空振りでも動く 遠藤健治さんが避難について語った「空振り三振はしても、見逃し三振はするな」という言葉が心に刺さりました。結果的に空振りになったとしても実際に避難することが、適切な判断と迅速な行動につながる一歩になり、災害時に生きとくと強く感じました。(岩沼市・東北福祉大1年・森健輔さん・18歳)

受講生の声

命守るため行動

遠藤健治さんの講義で、ハザードマップに「浸水域外」と掲載されていても、マップは一つの想定に過ぎず、安全とは限らないことを学びました。震災10年前に自分の住む場所の災害リスクを再確認し、命を守る行動を見直す必要があると考えました。(仙台市若林区・宮城大2年・尾形紗希さん・20歳)

空振りでも動く

遠藤健治さんが避難について語った「空振り三振はしても、見逃し三振はするな」という言葉が心に刺さりました。結果的に空振りになったとしても実際に避難することが、適切な判断と迅速な行動につながる一歩になり、災害時に生きとくと強く感じました。(岩沼市・東北福祉大1年・森健輔さん・18歳)



尾形紗希さん・20歳



森健輔さん・18歳

×モ311「伝える／備える」次世代塾を運営する推進協議会の構成団体は次の通り。河北新報社、東北福祉大、仙台市、東北大、宮城教育大、東北学院大、東北工大、宮城学院女子大、尚絅学院大、仙台白百合女子大、宮城大、仙台大、学都仙台コンソーシアム、日本損害保険協会、みちのく創生支援機構。